

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 19 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370408

研究課題名(和文) 戦時上海のメディア『新申報』と『大陸新報』の比較 陶晶孫の言語選択

研究課題名(英文) Comparative Analysis of the War-time Newspapers Xinshenbao and Tairikushinpo

研究代表者

中村 みどり (NAKAMURA, MIDORI)

神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30434351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では主に、日中戦争期の日本支配下の上海で刊行された二つの国策新聞、『大陸新報』(日本語)と『新申報』(中国語)の紙面を取り上げ、上海に留まった知日派の中国知識人の活動と言説について分析した。その中でも、日本留学の経験を有し、文学団体「創造社」の作家であり、かつ医学者として東方文化事業の上海自然科学研究所に勤務した陶晶孫に焦点を当てた。上記二紙における陶晶孫の動向に関する報道、および上記二紙に陶晶孫が発表した文章の分析を通して、彼がいかに戦時下日本の文化政策への「協力」を強要されながら、同時にいかに日中二カ国語の言説を用いて「抵抗」の意志の表明を行っていたかを考察した。

研究成果の概要(英文)：The primary goal of this research project was to analyze the activities and the discursive role of Chinese intelligentsia who were known as Japan experts in Shanghai during the World War II. I paid particular attention to Tao Jingsun's works published in local newspapers, especially in Xinshenbao (Chinese) and in Tairikushinpo (Japanese). Tao Jingsun, who was a medical scientist, studied in Japan and was known as a member of the literature group "Chuangzaoshe." Tao Jingsun was employed by the Shanghai Science Institute where the Japanese Foreign Minister advanced a cohesive cultural policy as part of the Eastern Cultural Project. My research project demonstrated the ways in which Tao Jingsun sustained his bilingual writing activities in local newspapers by exhibiting resistance against Japan's aggressive cultural policy.

研究分野：中国文学

キーワード：日中戦争 中国人日本留学生 知日派 文化政策 大東亜文学者大会 メディア 言語

1. 研究開始当初の背景

文学団体「創造社」の一員であり、作家であると同時にまた医学者として知られる陶晶孫については、これまで日本では伊藤虎丸氏、太田進氏等の先駆的な論考を通して、日本社会を深く理解し、日中のはざまを生きた中国知識人として紹介されてきた。陶晶孫に関わる研究は、主に大正期のモダニズム文学と自由主義の影響を受けた1920年代の日本での文芸活動、そして昭和期のプロレタリア文芸の影響を受けた、帰国後1920年代後半から1930年代初頭にかけての上海におけるプロレタリア演劇活動に焦点を当てて進められてきたと言えよう。

陶晶孫は日中戦争期に日本統治下の上海に留まり、かつ戦後台湾から日本へ亡命した経歴を有する。このため、1949年以降の中国政府の歴史観から外れ、中国では研究対象となりにくかった。しかし、近年では、中国の学术界でも日本統治下の文化状況を客観的に捉え直す動向があり、陶晶孫が戦時に中国語で執筆した作品を集めた『楓林橋日記』、戦後台湾から来日し、日本語で綴った作品を収めた『日本への遺書』の中国語訳の刊行が続いている。また中国の研究者、嚴安生氏による陶晶孫の伝記であり、かつ研究専門書である『陶晶孫その数奇な運命

もう一つの中国人留学生史』が刊行される等、研究対象として注目されつつある。

しかし、日中戦争時に日本統治下の上海に留まった陶が、日本外務省の対中国文化政策「東方文化事業」に関わり続け、かつ1944年の「第三回大東亜文学者大会」の副議長を務める等、知日派中国知識人として戦時日本の対中国文化政策にも協力せざるを得なかったことに対しては、劉平氏や鈴木将久氏等の研究があるのみである。また従来、陶晶孫の唯一の専門研究書であった『陶晶孫百歳誕辰記念集』に収められた年譜

と作品リストでは、彼の戦時の活動への言及は避けられており、当時の作品も網羅されていない。

応募者はこれまで、先行研究を踏まえて、日本留学時の陶晶孫が発表した作品を取り上げ、主人公の日中のはざまに立つ「彷徨者」としてのアイデンティティと浪漫的意識について分析してきた。また中国帰国後の陶晶孫は、「創造社」のメンバー張資平が上海で刊行した文芸雑誌『楽群』に積極的に作品を発表するが、その中の翻訳作品の原作がいずれも日本の同時代の前衛的なプロレタリア文芸作品であることを指摘した。そして「創造社」メンバーが上海で展開したプロレタリア演劇運動に対する陶晶孫の影響を分析した。さらには、陶晶孫が日本留学時に日本外務省の対中国文化政策「東方文化事業」の学費補給生であったことに着目し、外務省外交史料を用いて、彼が「東方文化事業」の上海自然科学研究所に入所するまでの足取りを明らかにし、また陶晶孫の文学作品の中に描かれた「東方文化事業」と中国人日本留学生の関係について考察を行った。

以上の研究を進める中、とりわけ日中戦争前夜の陶晶孫と「東方文化事業」との関わりを調べる過程で、文学者かつ医学者として陶晶孫が日中戦争時期にどのように日本の対中国文化政策と関係を持ち、また日中の政治のはざまに立つ自己の立場をどのように表明していたのかを考察したいと考えるに至った。

2. 研究の目的

前述の通り、近年では、劉平氏、鈴木将久氏等の論考により、日中戦争時期の陶晶孫の活動が考察されつつある。このような新たな研究動向の中で、また上記の応募者自身の問題意識に基づき、陶晶孫の文芸活動・医学方

面の研究活動を理解するには、日本留学時代の他、さらに中国帰国後、そして日中戦争時期にも目を向ける必要があると考える。このため、本研究では、日中戦争期の陶晶孫の文章が掲載された、当時上海で刊行されていた日本の国策新聞二紙、日本語新聞『大陸新報』（1939年創刊、1945年停刊）と中国語新聞『新申報』（1937年創刊、1939年より大陸新報社発行となる、1945年停刊）を取り上げることとした。

『大陸新報』に関しては、大橋毅彦氏等の研究の成果である『新聞で見る戦時上海の文化総覧「大陸新報」文芸文化記事細目』全3巻（2012）があり、戦時上海における日本統治下の文化政策とそれに呼応せざるをえなかった中国知識人について考察する手がかりとなる。一方、『新申報』に関しては、応募者の管見の限り、専門的な研究は未だにない（本研究の応募書類作成後、陶晶孫が『新申報』に発表した作品を取り上げた孫洛丹氏の論考が発表された）。

同様に戦時の日本統治下の上海で国策新聞として刊行された『大陸新報』と『新申報』を併せ読むことにより、戦時下で、統治国家の言語である日本語と被統治国家の言語である中国語を用いた言語活動を行った知日派中国知識人の文化的立場を複眼的に眺めることが可能となる。このため上記二紙に掲載された陶晶孫の文章を精読し、陶晶孫が日本の対中国文化政策とどのように関わったのかを辿る。その上で彼が如何に日中の二つの言語を用いて戦時を生きようとしたのか、陶晶孫の言語活動とアイデンティティを明らかにしたい。さらには、これらの研究を通して、日中戦争における知日派中国知識人の在り方について考察し、また国策新聞『大陸新報』と『新申報』の紙面の一端の分析を行うことも併せて目的としたい。

3. 研究の方法

(1) 『新申報』と『大陸新報』について

『新申報』（1937年創刊、1939年より大陸新報社発行となる、1945年停刊）は、現在のところ、日本では閲覧できないが、北京の国家図書館と上海図書館にマイクロフィルム全22巻が所蔵され、公開されている。また『大陸新報』（1939年創刊、1945年停刊）はゆまに書房からマイクロフィルム全23巻が刊行され、日本で閲覧が可能である。『新申報』については、資料調査で北京と上海へ赴いて閲覧し、『大陸新報』については、早稲田大学現代政治経済研究所図書室所蔵のマイクロフィルムを閲覧した。

(2) 戦時日本の対中国文化政策について

『新申報』と『大陸新報』の記事を追う他、主に日本国内にて、先行研究の資料収集を行った。

【初年度 = 2013年度】

国外

長期休暇を利用し、北京の国家図書館と上海図書館で『新申報』のマイクロフィルム全22巻を閲覧した。特に陶晶孫が1944年1月から編集を担当した文芸欄「千葉」を集中的に調査し、また「千葉」以外の箇所でも発表した文化論や社説にも目を通り、資料のコピーを収集した。

また北京の中国社会科学院研究員の趙京華氏、董炳月氏に面会し、現在の日中比較文学の動向および資料収集方法について教示を賜った。両氏の紹介を経て、陶晶孫研究の第一人者である嚴安生氏と面会する予定であったが、都合が合わず、電話を通して陶晶孫研究の現状について伺った。

国内

大橋毅彦等編著『新聞で見る戦時上海の文化総覧「大陸新報」文芸文化記事細目』全

3巻(2012)に拠り、日中戦争時の日本の文化政策と陶晶孫に関連する記事の一部をリストアップした。その上で、早稲田大学現代政治経済研究所図書室所蔵の『大陸新報』マイクロフィルムを部分的に閲覧した。

【次年度 = 2014 年度】

国外

長期休暇を利用し、台湾の国史館で国民政府関連のデータベースを用いて、日中戦争時期の日本統治下の中国知識人および陶晶孫に関連する資料の調査を行い、資料のコピーを収集した。また収集資料の整理を行った。

国内

前年度に収集した『新申報』の資料の整理とリスト作成を進めた。また引き続き、大橋毅彦等編著『新聞で見る戦時上海の文化総覧

「大陸新報」文芸文化記事細目』全3巻に拠り、日中戦争時の日本の文化政策と陶晶孫に関連する記事をリストアップし、その上で、早稲田大学現代政治経済研究所図書室所蔵の『大陸新報』マイクロフィルムを閲覧した。また資料のコピーを収集し、収集資料の整理とリスト作成を進めた。

【最終年度 = 2015 年度】

国外

長期休暇を利用し、上海図書館で民国期文献のデータベースを用いて、陶晶孫が帰国後上海で勤務していた中国系の医学大学、東南医学院に関する資料および戦時上海の日本の文化政策に関する資料の収集を行った。また陶晶孫の文章が集中的に発表された1944年の『新申報』の紙面を再確認した。これらの資料をコピーし、収集資料の整理を行った。

そのほか、陶晶孫研究の第一人者である巖安生氏に面会し、現在の研究の動向を伺うことができた。

国内

「大東亜文学者大会」と「日本文学報国会」に関する先行研究の資料を集め、整理を行った。

最終年度に当たるため、収集した資料をもとに陶晶孫の年表と作品リストを作成し、日本語と中国語での研究発表の準備を進めた。

4. 研究成果

本研究では主に、日中戦争期の日本支配下の上海で刊行された二つの国策新聞、日本語新聞『大陸新報』と中国語新聞『新申報』の紙面を併せ読み、その中でも、陶晶孫が発表した文章に焦点を当て、上海に留まった知日派中国知識人の活動と言説について分析した。『大陸新報』と『新申報』の閲覧、資料収集は予定通りに行い、また戦時日本の対中国文化政策や陶晶孫の医学関連の資料についても目を通すことができた。

本応募書類作成後、『新申報』紙上の陶晶孫の文章を取り上げた孫洛丹氏の論考が発表された。このため、本研究は、孫洛丹氏の論考を手がかりとしながらも、日本人研究者ならではの視点と日中双方の二か国語の資料閲覧の利点を生かし、『大陸新報』については大橋毅彦氏等の先行研究、戦時日本の対中国文化政策「日本報国文学会」や「大東亜文学者大会」等については、尾崎秀樹氏や杉本要吉氏、岡田英樹氏等の先行研究を参考としつつ、日中双方の先行研究をつなぎ、かつ双方に新たな視点を付与することを意識しながら研究を進めた。

『大陸新報』と『新申報』の文章を併せ読むことにより、日本側の圧力があったことは考慮すべきものの、数的には、むしろ日本留学時代および帰国後の上海での文芸活動時よりも、戦時において陶晶孫は多くの作品を発表していたことが指摘できる。また従来、日中の政治のはざまに翻弄された受動的な、

時には悲劇的なイメージをもって語られてきた陶晶孫であるが、『大陸新報』紙上では、むしろ日本語を用いて正面から日本の文化政策を強い辛辣な言葉で批判し続けていたことが明らかになった。さらに『新申報』に掲載された中国語の小説では、戦時期の日本統治下の上海で暮らす、中国知識人の幾重にも屈折した心情が暗喩的に語られ、戦時上海の知日派中国知識人の精神状況を知る資料として読むことができることがわかった。これら日中二カ国語の文章の精読を通して、陶晶孫がいかに戦時日本の文化政策に巻き込まれながら、だが同時にいかに日本側から強要される「協力」とそれに対する「抵抗」とのはざままで、まさに身を削るような二カ国語の言説活動を行っていたことが浮き彫りになった。

以下の通り、研究の成果をまとめながら、陶晶孫の年表と作品リストを作成中である。

学会発表

本研究に関する考察はまだ過程ではあるが、2014年には、途中経過の研究成果を中国語原稿「戦争下の記録と故事：陶晶孫発表於《新申報》的作品」としてまとめ、日韓の中国文学者のワークショップ「東京-首爾 中国現代文学研究対話会」(会場：早稲田大学)にて発表を行った。その場では、日本統治の経験の有する韓国側の中国文学研究者から貴重な意見を賜ることができた。また発表原稿「陶晶孫『牛骨集』[楓林橋日記]を読む」としてまとめ、中国文芸研究会和歌山夏合宿(会場：加太淡嶋温泉 大阪屋「ひいな湯」)で発表し、その場でも日中の研究者から貴重な指摘を頂いた。2015年には、「東南医学院と日本 陶晶孫の足跡を中心として」をテーマに陶晶孫の医学関連の活動についてまとめ、留学生史研究会(会場：神奈川大学)にて発表を行った。さらに2016年には、上海で開催される「文化空間と文化融合」国際

学術シンポジウム(会場、上海社会科学院)に参加し、研究成果を発表する予定である。

研究論文

研究論文としては、中国語原稿「戦争下の記録と故事：陶晶孫発表於《新申報》的作品」をまとめて、『2014 東京-首爾 中国現代文学研究対話会論文集』(早稲田大学商学院・日本大学文理学部中文科・慶応義塾大学日吉中国現代文学研究会・東京大学文学部中文科共同出版、2014年)に掲載した他、「陶晶孫の日本留学と医学への道 陶烈、佐藤みさをとの交流から」を執筆し、大里浩秋・孫安石編著『近現代中国人日本留学の諸相 「管理」と「交流」を中心に』(御茶の水書房、2015年)に収めた。さらに中国語原稿「淪陷上海的叙述与故事：陶晶孫的文学障地」を完成し、『史料と闡釈』(復旦大学出版社、2016年)に掲載される予定である。

今後も本研究成果を踏まえて、日本と中国にて研究発表を行い、当初の予定通り、学術における日中の交流に貢献したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

中村みどり、

「淪陷上海的叙述与故事：陶晶孫的文学障地」、査読有、『史料と闡釈』、2016年、復旦大学出版社(掲載決定)

中村みどり、「陶晶孫の日本留学と医学への道 陶烈、佐藤みさをとの交流から」、査読無、大里浩秋・孫安石編著『近現代中国人日本留学の諸相 「管理」と「交流」を中心に』、御茶の水書房、2015年、327-356頁

中村みどり、「戦争下の記録と故事：陶晶

孫発表於《新申報》的作品」、査読無、『2014 東京 - 首爾中国現代文学研究対話会論文集』、早稲田大学商学院・日本大学文理学部中文科・慶応義塾大学日吉中国現代文学研究会・東京大学文学部中文科共同出版、2014 年、124-132 頁

()

研究者番号：

【学会発表】(計4件)

中村みどり、「跨華界与租界的文艺活動」(仮)、「文化空間与文化融合」国際學術シンポジウム、2016 年 8 月 26 - 27 日(全日程発表予定)、上海社会科学院(上海・中国)

中村みどり、「東南医学院と日本陶晶孫の足跡を中心として」、留學生史研究会、2015 年 10 月 3 日、神奈川大学(神奈川)

中村みどり、「戦争下の記録与故事：陶晶孫発表於《新申報》的作品」、東京-首爾中国現代文学研究対話会、2014 年 12 月 18 日、早稲田大学(東京)

中村みどり、「陶晶孫『牛骨集』[楓林橋日記]を読む」、中国文芸研究会和歌山夏合宿、2014 年 9 月 1 日、加太淡嶋温泉 大阪屋「ひいな湯」(和歌山)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 みどり (NAKAMURA MIDORI)
神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号： 30434351

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者